

いま、なにを詠みますか

穂村 弘×斉藤 斎藤

なぜ短歌を始めたか

斉藤 とりあえず、短歌との出会いというところから入りましょうか。穂村さんはおいくつの時に短歌を始めたんですか？

穂村 二十二くらいですかね、もう三十何年も前です。

斉藤 なぜよりによって短歌を？

穂村 ねえ(笑)。周りには短歌を作っている人はいなかった。だいたいみんなテニスとかスキーとかサーフィンとか、デートとかしていましたね。

斉藤 小説とか詩とかもありますが、ものを書く、表現するのになぜ短歌だったのですか。短歌を始める前に他のジャンルの作品を

作ったことはあったんですか？

穂村 中学校の時にポエムみたいなものを書いてました。ロマンチックな「あなたはサクランボ」みたいな感じですよ。斉藤さんは？

斉藤 僕は二十九歳くらいからです。たまたま図書館で短歌の本を見ましてね。

穂村 やることが世間にはもつといろいろあるでしょう、テニスとか株式投資とか。

斉藤 運動神経はないし、株も多分やけどしますね。

穂村 二十九歳の青年が短歌を作って楽しかったですか？

斉藤 「次々に走り過ぎゆく自動車の運転する人みな前を向く」という奥村晃作さんの歌を読んで、「なんだこれ？」と思って、わり

とすぐに奥村先生のカルチャーセンターに行ってみたくて。奥村さんという人に会ってみたくて思ってたんです。

穂村 どうでした？ 会ってみて。

斉藤 やっぱりすごかったですね。インターネットに奥村さんの日記があったんです。当時、七十歳くらいだったと思うんですが、「高速道路の高架下の橋桁に向かって七十球全力でボールを投げ込んだ」みたいなのがあって、何をやっているんだらうこの人は、と。存在に異様な迫力がありました。

穂村 カルチャーセンターでは、周りみんな年上じゃなかったですか？

斉藤 年上でした。でも、あんまり抵抗はなかったですね。ちょっとほめられて、その気



になって、ずるずると今まで続けているという感じですよ。

穂村さんは、短歌を始めてすぐにはまったのですか？

穂村 他に何をしていたのかわからなくて……。でも周りに短歌をやっている人なんていないから、学校の売店で小さなカードを買って、それに短歌を書いて友達に見せたりしていました。結社の存在も知らなかったし、自分が短歌だと思ったものを書くだけだから、全く手応えがない。すごく焦りながら暮らしていました。どのくらい経ってからかな、加藤治郎さんという方が葉書をくれたんです。それで、初めて短歌を作る人と実際に

会って、そうすると、少し現実感が出てくるというか。

斉藤 他の生命体を発見したような。

穂村 今でも本屋さんで、短歌コーナーに人がいると、顔をのぞきたくなっちゃう。どんな人が短歌を作っているんだろうって。

斉藤 どうして短歌に辿り着いちゃったのだろうっていうのはありますよね。

日常の裏にひそむ感慨

斉藤 お互いにいいと思う歌を選んできて、会場の皆様にも配られているので、穂村さんのあげられた歌から行きましょう。

穂村 私はなんとなく気になった歌をあげてきました。

おねがいねって渡されているこの鍵を
わたしは失くしてしまう気がする

東 直子

意味は書いてある通りなんだけれど、すごく不思議な短歌だなと思いました。なんの鍵かわからないけれど「鍵」って大事なもので

す。それを「おねがいね」って誰かにお願いまでされている鍵だから、なおさら大事なものです。普通だったら「わたしは決して失くしはしない」と思うだろうけれど、東さんは「わたしは失くしてしまう気がする」と。これが「わたしは決して失くしはしない」という短歌だったら、全然面白いと思わなかった。「わたしは失くしてしまう気がする」って、怖れて、不安に思っているのだけれど、同時に失くすことを望んでいるような感じもあって、ほくもちよつと気持ち良かったんです。

日常生活では、決して失くしはしないとあって生きているのだけれど、時々、蒸発してみたいとか、記憶喪失になってみたいとか、ほんやりとした憧れのレベルなんですけれど、そう思うことがあります。本当にそうになったらパニックになってしまうから、多分やらないだろうけれど、だからこそ憧れのようなことがあって……。そういう感じですよ。

斉藤 その感じは、ずっと今でも変わらないですか？

穂村 年をとったから、そういう気持ちが余計に強くなったと思うんですよ。若い時って、家族もなくて記憶だっていたい思い出



があるわけじゃないけれど、自分がいろいろと人生の選択をして、この職業、この人と結婚する、ここに住むというようにかたまってくると、逆にそれを全部失くしてみたいというような気持ちがあるような気がします。東さんがそういうつもりかどうかわからないけれど、「大事なものをわたしは失くしてしまふ気がする」という感覚にひかれたんです。次は若い男性の歌。

食券をなくしてしまうカウンター席へ
とすわるまでの宇宙で 伊舎堂仁

こっちは、本当に失くしてしまう歌です。

食券を買って、それを持ってカウンターに座る数メートル、時間にして数秒の間に、その食券が忽然と消える。ありますよね、そういうこと。この歌の面白いのは「宇宙」という言い方をしたところですね。だって、これはお蕎麦屋さんとか食堂でしょう。たしかに、宇宙には違いない。それも宇宙だし、ここも宇宙だし、どこだってみんな宇宙だからね。でも、あつたはずの食券が忽然と消えたということと、この「宇宙」という言葉が繋がっている気がしてね。ぼくはそういう歌、取り返しのつかない何かが起こっちゃう歌、歌が好きみたいです。

次は、斉藤さんの初期の代表作です。

雨の県道あるいてゆけばなんでしょう
ぶちまけられてこれはのり弁 斉藤斎藤

雨の中、傘をさして県道を歩いていたなら、何かが道に散らばっている。「なんだろう？ この異様なものは」と一つひとつを冷静に見ていくと、御飯とか竹輪とか、白身魚とか天ぷらとか、いろいろなパーツがあつて、「は

はあ、これはのり弁がぶちまけられているんだ」と思ったということですね。これも取り返しがつかないですよ。普通、代表作ってロマンチックだったりしみじみしていたり、すてきな歌が多いですが。

斉藤 いや別に、私がこれを「代表作にしてくれ」と頼んだわけではなくて（笑）、私はすてきな歌が少ないのでそうなってしまつたわけですね。

穂村 どうしてこれを歌にしようと思ったんですか？

斉藤 そうだなあ、自分ではわからないです。穂村さんと私を客観的に、第三者的に見ると、やはり世代の違いなどがある。先ほどの東さんの歌は普通にいいなと思いますが、伊舎堂さんのように「宇宙」まで言われると、私はひいてしまうタイプです。食券を、カウンターまでの数歩でなくしてしまうというところはすごくわかるし、取り返しのつかなさのようなものもわかりますが、そこで「宇宙」という詩的成分を、自分は増したがついていないなど。だから、歌が身も蓋もなくなるのかもしれない。

穂村 高速道路でも、国道でもなくて、県道

がいいわけね。

齊藤 それは車線の問題ですかね。

穂村 ぼくはず「ハイウェイ」とか書くも
んね。齊藤さんとぼくとは十歳違う、ぼくは
バブル世代です。

この歌は、最後の最後に「のり弁」が出て
くるところがいいですね。つまり、いきなり
「のり弁が落ちていた」と書くこともできる
けど、短歌って上から順番に読んでいくか
ら、言葉の順番がすごく重要です。引つ張っ
て引つ張って、普通はここで「なんでしょ
う」とは言わないですよ。「ぶちまけられて
これは」と、そして最後の最後に「のり弁」
という正体がわかる。なんでぶちまけられて
いたんでしょうね。

齊藤 そこはあまり考えないですね。実際ぶ
ちまけられてたんだからと、あきらめる。

多くなつたアイディア優先の歌

穂村 齊藤さんの持ってきた歌で、どこが好
きか教えてください。どれでもいいです。

齊藤 じゃあ、大島史洋さんの歌から。

「未来」にて金井秋彦に会いしこと苦し

き彼を戒めとして

いきなり説明の要る歌を引いてきてしま
いました。「未来」というのは、短歌結社の雑
誌ですね。金井秋彦という歌人の歌をどのく
らいの人がご存知かわかりませぬけれど、も
し、まったく知らなかったとしても「苦しき
彼を戒めとして」というのには、ちよつと
ぐつとくるかな。これは、誰かが何かをや
かしちゃって困っている、苦しんでいるか
ら、それを自分の教訓にして、自分はそうい
うことはしないでおうという、そういう歌
ではないと思うんですよ。「苦しき彼を戒め
として」というのは、音的にも苦しんでいる
感じがします。ちよつとゴシップ的な話に
なつてしまいますけれど、この金井秋彦とい
う人は、二十三歳の時に十四歳年上の女性歌
人と駆け落ちしたことがあります。作風の
にも、「未来」にいましたから、近藤芳美さ
んの歌の作りと似たところはあるんですけ
れど、社会的なことを詠つても、視線が外に向
かうよりは自分の内に向かつていく印象を受
けるような人です。

「駆け落ちなんかするから苦しいんだよ」と

いうことでは全くなくて、純粹に、愛に真面
目なゆえに苦しい道を選んでしまった、その
真面目さにある程度の共感をしながら、で
も、真面目すぎるとすごく苦しみむということ
を自分で追体験をした上で、そこまで真面目
にならないでおうと、この大島さんも真面
目に考えているような気がする。真面目に真
面目でブレイキを踏む、みたいなね。この
「苦しき彼を戒めとして」というのは、すご
く抽象的な言葉運びだけれど、なんとなくそ
の背後には生きている一人の人間が、あつち
に頭をぶつけこつちに頭をぶつけながら考え
ていったという経路が見えるような感じがし
たのです。

穂村 この歌の「金井秋彦」のところに、
もつと誰もが知っているような人で、もつと
効果を上げ得る人名にすることもできる。で
も、作者は初めからそのことをわかつて覚悟
して作っているわけですよ。

齊藤 そうですね。

穂村 駆け落ちをした著名な俳優などではだ
めだ、と。

穂村 この歌、か行音がすごく多い。「くる

しきかれ」と、か行で苦しいというところが「かないあきひこ」と対応しています。もつとすんなりした名前だったら、おそらく大島さんは入れなかつたんじゃないかな。少なくとも「金井秋彦」という音の響きを意識していたと思うけど、斉藤さんがそこまでこの歌をいいと思うのが面白いですね。

斉藤 そうですか？ ちよつとわき道に入つてしまいますけれど、最近の短歌雑誌などの話題として「大喜利問題」というのがあります。もともとは馬場あき子さんと穂村さんの対談の中で、最近の若い人たちの短歌はアイデアが優先されて、言葉がつるんとしている感じで、背景に人間とか人生を感じない歌が多いんじゃないかという批判を馬場あき子さんがされました。その批判について、私は半分くらい共感するところはあるんです。やっぱり、ちよつとつるんとしていてアイデアに走っている気がします。でもベテラン歌人の歌が大喜利でないかと言ったら、それも問題があるのではないかという気がして、つまり、大喜利のお題が違うだけなんじゃないかという気がしないでもない。「生きるとは何か」とか「老いるとは何か」とい

うお題で、アイデアがいちばん効果的に伝わるような言葉の運びで、ベテランの方も作っているような気がして、極端に言うくと、どっちも歌の作りは同じじゃないかという感じがする。

そういう中で、歌を読んで「この背後に人間がいるな」と思うベテランの歌人というところで真つ先に浮ぶのが大島さんなんです。だつてこの歌は、金井秋彦の苦しみをどう受け止めるか、ということをごく考えた形跡があると思います。大島さんはどんな人名を入れれば効果的かどうかということも考えていないと思います。

最善の語法を探る

斉藤 穂村さんの引いていただいた歌に戻りましょうか。

バラバラになつてもバナナはバナナなのにテープで房を固定する父

戸田響子

穂村 友達の家遊びに行つて、バナナの房

がテープでぐるぐる巻きにされていたら「やばい」という感じがすると思うけど、多分このお父さんにとつてバナナというのは、食べる時に初めて房から挽ぐものであつて、ばらばらになつたバナナというのは取り返しがつかないと思つているんでしょうね。そういう発想がほくにはなかつたから、固定観念がすごく面白かつたんです。たしかに、自分の父親や母親としゃべる時、向うが当然と思つていることとこつちが当然と思つていることとにすくずれがあるときがあります。それがまるで可視化されたような感じだと思つて。

斉藤 面白いと思います。廣西昌也さんの歌、「ひも状のものが刺けたりするでせうバナナのあれも食べてる祖母」を踏まえているんでしょうかね、ちよつと。

穂村 バナナのすじを食べるか食べないかというの、世代とか性別とか性格とか地域とか、いろいろな問題があるんだらうと思うけど、このお祖母さんは当然食べるものだと思つていたんでしょうね。

斉藤 バナナというのは、家族の中のそういう亀裂を浮き彫りにするんですかね。

穂村 昭和のある時期まで、バナナつてすく

く貴重だったからね。

私の排泄物が私より遠くへ旅をする新

幹線

奥村知世

新幹線に乗って、例えば名古屋辺りでトイレに行き、自分は京都で降りたとして、でもその後、自分が出した排泄物は、大阪、広島と二七〇キロの速さで遠ざかって行くという、その取り返しのかなさ。

斉藤 そうですね(笑)。

穂村 猫がトイレをした後に砂をかけるのは、排泄物が重要だからですよ。自分も動物だから、何かこう、自分だけ降りちゃっていいのかな、というような感じ。持ち帰ってくださいって言われても困るけどね。

斉藤 「バナナを固定する父」も「遠くへ旅をする新幹線」もすごく面白いと思いますけど、なんで「父」とか「新幹線」で終わるんでしょうかね。「遠くへ旅をする新幹線」というまとめ方をされると、取り返しのつかない感じがあまりしなくなるのでは。

穂村 技術的な問題があるのかな。「ぶちまけられたのり弁」のほうが、たしかに取り返

しのつかない感じがありますね。「わたしは失くしてしまう気がする」というのも、取り返しのつかない状態が微妙に残ります。「宇宙で」と言われると、「ああ、そうか」という感じがするかな。

穂村 バナナも新幹線の歌も、新聞の投稿歌なんですね。投稿歌の文体みたいなものが、もしかしたらあるのかもしれない。

斉藤 それで多分、大喜利問題が出てくる。

「テープで房を固定する父」とか「遠くへ旅をする新幹線」が、なんとなくアイデアっぽい、大喜利っぽいと思う私のような人と、別にそこには引つかからない人たちがいて、そこにもちよつと谷があるような気がしますけれど。

穂村 いや、もつと上手くなれば、もつと上手く詠えるかなという感じはします。最善の語法ではないという感じはするね。

斉藤 続けていけばクリアされるような問題でしょうかね、単純に。

穂村 「のり弁」が出るタイミングが、結句のいちばんぎりぎりなのに対して、早いよね、「排泄物」の出るタイミングは。

斉藤 語順の問題、「それでいいや」という

出し方に見えます。「排泄物」は早めに出しちゃって、「新幹線」でバシッといけばいいという感じ。この作者がどのくらい取り返しのつかなさを出したのかどうかということにもよると思うのですが。

穂村 そうですね。

斉藤 穂村さんのあげた次の歌ですが、意味がわからなかったんです。

ままよままよ乗り違えた電車から線路に零す梅の仁丹 橋高なつめ

穂村 「ままよままよ」というのは「えーい、ままよ」という、あの「ままよ」です。乗り違えちゃったら普通は焦るんだけど、「まあいいや」と思って、そして梅の仁丹を食べようとしたら、わざとか偶然か知らないけれど、線路に零れちゃったのかなと思います。つまり、失敗が二つある。一つは乗り違えちゃったこと、もう一つは梅仁丹を零しちゃったこと。失敗にもう一つ失敗が重なったことで、本当に「もういいや」という感じが出たのかなと思います。

斉藤 下の句「線路に零す梅の仁丹」、零し

ちゃったということなんです。

穂村 わざとかもしれないけど。

斉藤 私は一読、乗り違えたのは失敗だけど、仁丹を零したのはわざとで、だからなぜ仁丹を零しているのかわからなかった。

穂村 呪術的なものかな(笑)。

斉藤 樹海に入って行く人が印をつけるような。

穂村 仁丹って呪術的な食べ物で、万能ということなんでしょう？ 昔は、薬にそういうイメージがあったと思います。今はフリスクがそうなんだけれど。この歌の「ままよままよ」というそれぞれの字に、仁丹みたいな小さな丸がある。わかる？

斉藤 「ま」も「よ」も。

穂村 そうそう、だから上に六個小さい丸があつて、仁丹が線路に零れていくような図形表現というのかな、それもなんだか面白いなと思つたんです。ちゃんと乗れたことは短歌にならないんだけどね。

斉藤 ちゃんと乗れた歌を作りたいですね。

穂村 ちゃんと乗りたい歌、すごく難しいと思う。だって、どう作ればいいのか？

斉藤 ちゃんと乗れた喜びを噛み締めていた

ら、それはちゃんと乗れていないですもんね。

穂村 それが、短歌の不思議なところかな。

気持ちがこもってれば……

穂村 ご自分の近作に近いものを二首あげていますね。なぜ、多くの歌の中からこれを選ばれたのですか？

斉藤 人には引かれることはないだろうけれど、自分ではちよつと気に入っている歌つてありますよね。

穂村 なるほど。

ああ日記を書かなければといつのまに眠ってしまうだけでも違う

「ああ、日記を書かなきゃ」と思いながら身体を起こして書くまでにはいたらず眠ってしまった。「だけでも違う」というのが面白いんだけれど、これは、「もういいや、日記」と思つて寝るのと、「日記を書かなきゃ」と思つて寝るのは違う、ということ？

斉藤 はい、「書かなければ」と思つて寝るだけでも、思わないよりはいいよ、と。

穂村 普通は、違わないってみんな思つて生きていくわけだよ。心の中で思つて「来た」というのは会社などでは通用しない言い訳で、だからそれを反転させているのだと思ふけれど、それで当てる？

斉藤 そういうふうに、穂村さんに批評していただくと、そういうことかなと思うくらいですね。本当に、これはそう思つたんで(笑)。

穂村 「日記」というところが、すごく気になっていています。「ああレポートを書かなければといつのまに眠ってしまうだけでも違う」だったら、例えばそのレポートをやつてこなかった人が二人いて、「すみません、忘れてました」と一人が言つて、「僕はやらなきゃと思つたんですけれど寝ちゃつたので、彼とは違います。少なくとも、やらなきゃと思つたから」というのは成立しないでしょう、会社とか学校では。

斉藤 はい、成立しないですね。

穂村 だけど、これは日記で一人の心の中の問題だから、「違う」ということの意味が違うと思つたの。それが知りたいんだけど。

斉藤 考えてみれば、短歌だつて儲かるわけ

でもなし、作らなくてもいいわけで、何かを見ていいなと思って「ああ、これを歌にしよ」と思っただけでも、それはいいのかなという気がして。最悪、仕上げなくてもいいというのは、ありませんか？

穂村 どういうこと？

斉藤 短歌をやっているというのは、結局、日頃あったことで「この景色が好きだな」とか「これはちよつと違和感があるな」とか感じて、締め切りなどがあればそれを拾ってなるとか歌に出しますが、出さなかったとしても、「あつ」と思っただけでも、まあいいと思う、というのがあるんですね。

穂村 あの、うーん。

斉藤 いや、それは同意を求めているわけじゃなくて（笑）、社会的にはだめなことだと思えます。

穂村 石原吉郎という詩人ね。シベリア抑留の体験があるのですが、その人の短編集の中に、「居すまいを正すな／そのままの姿勢で、／いまたちに祈れ！」という言葉があった、それに衝撃を受けました。「寝転がって鼻くそをほじりながら祈れ」みたいなわけで、「それはできないでしょう」と言ってい

るお前がだめなんだ、と言われている気がしてね。斉藤さんの意識も、それくらいの現実、レポートとか宿題をつかさどる社会の現実に対するアンチがあるって、僕は熱く思っているから、なんか寂しいわけ、あつさり言われすぎて。

斉藤 でも結局、気持ちがかもってれば、姿勢が正しくても、正しくなくてもいいわけじゃないですか。

穂村 でも「それじゃあいけない」ということとの方が、圧倒的に説得力を持っているよ。「愛している」ってひと言も言わなかったり五十年一緒に食べていて「御飯がおいしかった」ってひと言も言わなかったから離婚された旦那さんみたいな話で、思っているだけではだめだね。

斉藤 あ、それは普通に言わなきゃだめですよ。

穂村 これとの違いは？

斉藤 誰かを愛しているというのは伝わらないと意味がないと思うんですが、「日記を書かなければ」というのは誰に伝わらなくてもいいので。

穂村 ポイントは「日記」ですかね。

斉藤 「祈り」って社会的なことではないじゃないですか。

穂村 じゃあ「手紙」は？ これが手紙だったら成立するの？

斉藤 「手紙」だったら、半分くらい成立しますかね。誰宛でもない手紙っていうのもあり得ますし。

穂村 死者への手紙だったら成立するってことだよな。

斉藤 そこは、成立しかけますね。

穂村 死者への手紙は日記にかなり近づいていて、心が問題になる。

斉藤 生きている相手でも、もちろんそういう側面はあると思いますけれどね。

穂村 釈迦の歌を読んだけど、彼は先生だから、「桜の花ちりぐ／にしも／わかれ行く 遠きひとり／と 君もなりなむ」は、

卒業生への餞の歌だつて言うんだけど、ここには全然祝意がないわけ。それで、友人が亡くなった時の追悼の歌にも、やっぱり全然甲意がない。ただ一人の人間が消えたということだけを詠っている。極端なことを言うのと、
遥空の卒業の餞の歌と友人が死んだ時の歌と、そっくりなわけ。僕はそれにすごく感動

した。「おめでとう、これから君たちは社会に羽ばたいて……」なんて言った人たちがその生徒を忘れても、逕空はきつと忘れないと思う。みんな号泣して亡くなった人を悼むけれど、逕空は「なき人の／今日は、七日になりぬらむ。／ 遇ふ人も／ あふ人も、／ みな 旅びと」と。そんな追悼歌、ないんじゃないかな。

順接と逆接の妙

斉藤 多分、穂村さんと私の考え方の同じところと違うところが、今、いちばんぶつかっているんだと思いますね。

穂村 どこが同じで、どこが違うの？

斉藤 なんて言うのかな。友人を悼んだ歌と卒業生を送る歌が、同じテンションということで、同じスタンスで書かれていることで、友人を悼んでいても悼んでいないかのような歌を発表することの意味がまた発生するじゃないですか。そこを批判するつもりはないですけど、それを社会的アンチと捉えたくない私があります。気持ちが入ってればいいんですけど。

穂村 アンチっていうわけじゃなくて、「おめでとう」を言った人がその生徒のことを忘れ、泣いて悼んだ人が死んだ人のことを忘れても、祝意も弔意も見せなかった逕空だけがその人を忘れないということが、その文体の中にあって、僕は感じたのね。

斉藤 ブルーハーツの「人にやさしく」という歌に「僕はいつでも 歌を歌う時は マイクロフォンの中から ガンバレって言っている 聞こえてほしい あなたにも ガンバレ！」っていう歌詞があつて、穂村さんは「ガンバレって普通に言えるってすげーな」みたいなことを書かれていませんでしたっけ。

穂村 その歌だったかな。

斉藤 勘違いですかね、すみません。ブルーハーツって、パンクロックなのに真つすぐなことを全力で言えばそれが伝わるっていうことを言つて、それに衝撃を受けたことがありました。ひっくり返したからどうか、そういうところはブルーハーツを経ていると言いたくなくなるなという感じがしているんですけど。

穂村 塚本邦雄が典型的だけど、ひっくり返

す逆接の美意識というものがすごく浸透したでしょ？ あの時点では順接ばかりの世界だったから塚本さんが命がけて逆接にしたわけだよ。それはすごく感動的だったけど、伊藤一彦さんとか順接の人は厳しかったと思う。逆接がノーマルな状態になって、オセロを全部ひっくり返されちゃったわけだから。でも今はどちらも相対化されている。僕らは、その逆接の時代の最後だから、さっき言った詩的みたいなものへの執着はその名残りだと思つたのです。

(岐阜県 郡上市総合文化センターにて)

